



第53図 埋没河川跡と飛鳥時代～奈良時代の集落位置図 (S = 1/8000)

内町の南東隅に位置しており、近世初頭以降の遺構については八尾寺内町に関わるものと推定される。八尾寺内町は、久宝寺内町の森本七郎兵衛を指導者とする17人の久宝寺村民と顕証寺下の慈願寺が慶長十一年(1606)に、久宝寺内町の安井氏の支配下から自主性を獲得するため村を離れ長瀬川沿いの荒野を開拓し移住して成立した村である。やがて、東本願寺の掛所としての大信寺御坊を中核とした寺内町が形成されており、畿内の中では成立時期が最も新しい寺内町と理解されている。現存する絵図として『河内国若江郡八尾郷絵図』(第54図参照)がある。絵図の製作時期は明確でないものの、屋敷地の屋号等から江戸時代中期の享保年間(1716～1735)前後に描かれたものと推定されている。絵図によれば、北西隅の大信寺を中心に基盤日状に道路が配置さ

れており、寺内町周辺には、堀(環濠)・土塁が圍繞しており、それらを切る形で西口門、東口門、南口門、北口門、今口門の五箇所の出入口が設けられている。絵図と調査地点との比較では、八尾寺内町の南東隅部にあたり、屋敷地の屋号では油屋、柏原屋、小山屋、吉田屋が該当し、第1面で検出した井戸および竹樋がこれらの屋敷地区画と整合しているが、第2面で検出した近世初頭の遺構群については、絵図と異なるようである。従って、第2面で検出した遺構群については、江戸時代中期の享保年間(1716~1735)以前の八尾寺内町内の町屋区画を示す遺構であった可能性が高く、出土遺物の年代からみて、八尾寺内町の成立時期である慶長十一年(1606)とも符合している。



第54図 『八尾郷絵図』にみられる屋敷割(屋号) [南東隅部分が西区] (註21に加筆して転載)

註記

- 註1 西村公助 1995「IV東郷遺跡(第46次調査)」「東郷遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告48」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 坪田真一 1996「I成法寺遺跡(第7次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告51」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註3 高萩千秋他 1983「成法寺遺跡—八尾市光南町1丁目29番地の調査—」八尾市教育委員会
- 註4 坪田真一 1992「平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II)」(財)八尾市文化財調査研究会報告35」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註5 西村公助 1993「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 XIV成法寺遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告39」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註6 西岡三四郎 1977「人面土器」『八尾市史(文化財編)』八尾市役所
- 註7-1 中村清美 1994「成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅵ—八尾市南本町1丁目所在及び八尾市東本町5丁目所在(東郷遺跡)」大阪府教育委員会
- 註7-2 岩瀬 透 1994「東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ」大阪府教育委員会
- 註7-3 地村邦夫 1997「東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅷ」大阪府教育委員会
- 註8 原田昌則 1991「成法寺遺跡〈第1次調査〉」(財)八尾市文化財調査研究会報告33」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註9 高萩千秋 1991「成法寺遺跡〈第2次調査〉」(財)八尾市文化財調査研究会報告33」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註10 高萩千秋 1991「成法寺遺跡〈第3次調査〉」(財)八尾市文化財調査研究会報告33」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註11 坪田真一 1996「I成法寺遺跡〈第7次調査〉」(財)八尾市文化財調査研究会報告51」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註12 坪田真一 1996「II成法寺遺跡〈第8次調査〉」(財)八尾市文化財調査研究会報告51」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註13 清 斎 1995「東郷庵寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要7』八尾市教育委員会文化財課
- 註14 平成9～10年度(財)大阪府文化財調査研究センター調査 終了報告(内部資料)
- 註15 清 斎 1995「7.成法寺遺跡(93-521)の調査」『八尾市内平成6年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告31平成6年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 坪田真一 1994「IX成法寺遺跡(第12次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告42」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註16(1) 前掲註6より掲載。写真図版から作成。口径13.5cm、器高11.0cm。2面に人面墨書。(S=1/8)
- (2) 前掲註7-2より掲載。口径15.8cm、器高12.8cm。3面に人面墨書。(S=1/8)
- (3) 前掲註7-1より掲載。口径15.8cm、器高11.5cm。4面に人面墨書。(S=1/8)
- (4) 前掲註15より掲載。口径15.8cm、器高12.6cm。4面に人面墨書。(S=1/8)
- (5) 前掲註7-3より掲載。口径18.1cm、器高16.0cm。2面に人面墨書(S=1/8)
- (6) 前掲註7-3より掲載。口径8.4cm、器高4.8cm。2面に人面墨書(S=1/8)
- 註17 田中勝弘 1973「黒書人面土器について」『考古学雑誌 第58巻 第4号』
- 註18 前掲註14
- 註19 本書掲載「I東郷遺跡(第34次調査)」
- 註20 沢井浩三 1988「第3章 第6節 寺内町の発展 2.八尾寺内町の形成と発展」『増補版 八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
- 註21 櫻井敏雄・大草一憲 1988「寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺寺内と八尾寺内を中心として—」八尾市教育委員会

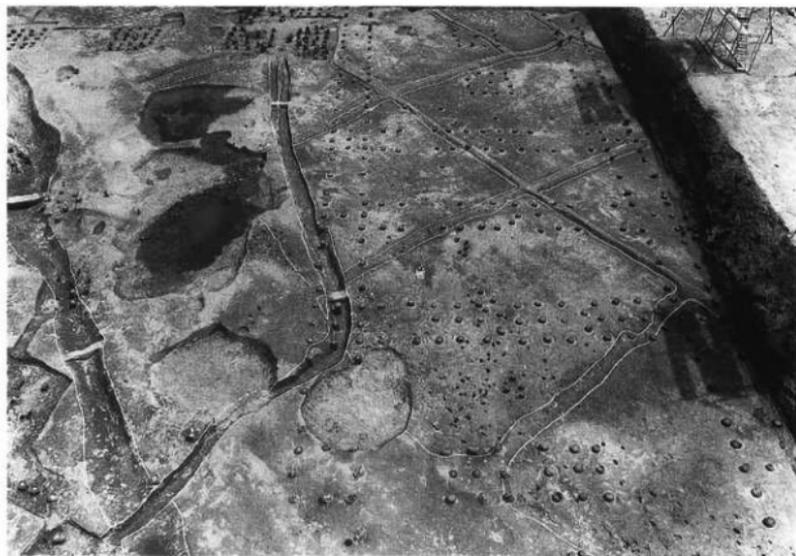
圖 版



東区 第1面全景(左が北)



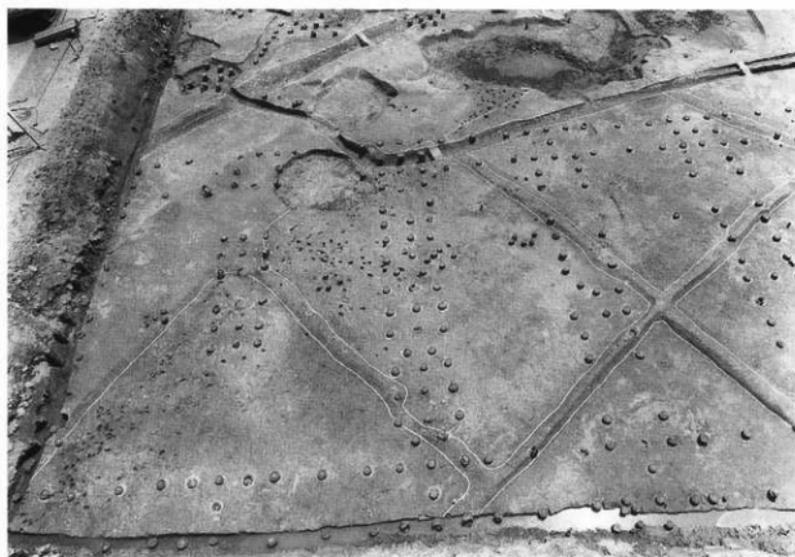
東区 第1面東部遺構検出状況(北から)



東区 第1面西部遺構検出状況(北から)



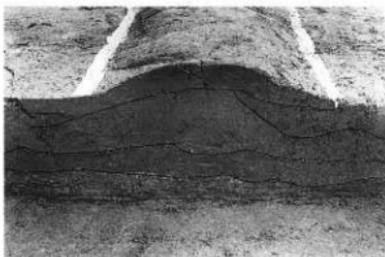
東区 第1面水田遺構南部検出状況(西から)



東区 第1面水田遺構北部検出状況(西から)



畦畔101断面(北東から)



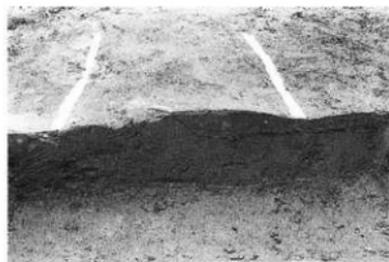
畦畔102断面(北東から)



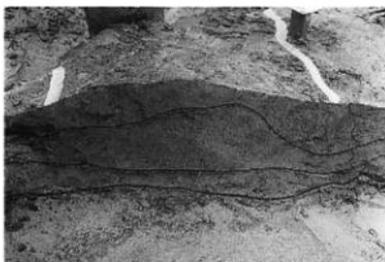
畦畔103断面(北東から)



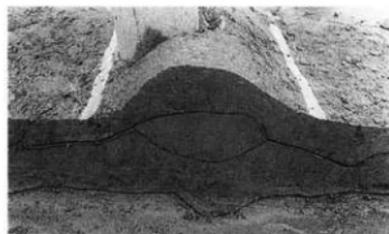
畦畔104断面(南西から)



畦畔105断面(南西から)



畦畔106断面(北西から)



畦畔107断面(南東から)



畦畔108断面(南東から)



畦畔109断面(南東から)



畦畔111断面(北東から)



畦畔112断面(北東から)



畦畔113断面(南東から)



畦畔114断面(北東から)



畦畔115断面(南東から)



畦畔116断面(南東から)



畦畔117断面(南西から)



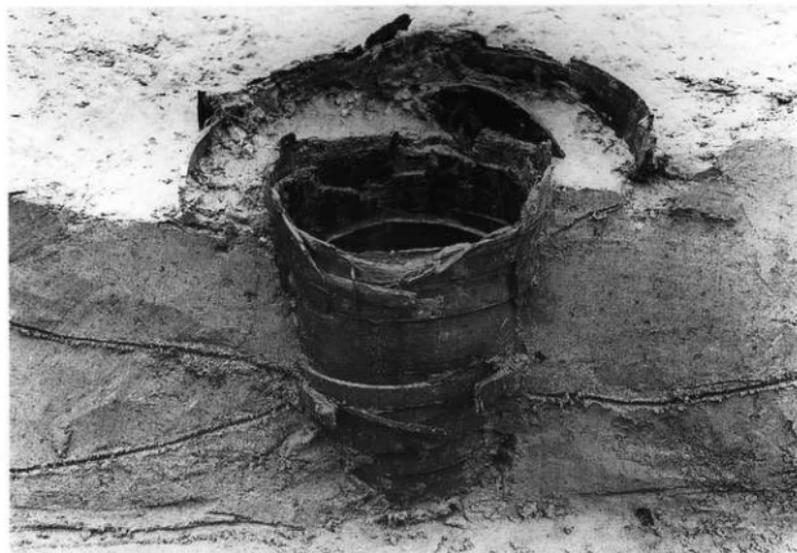
東区 ESE-101検出状況(東から)



東区 ESE-102検出状況(北から)



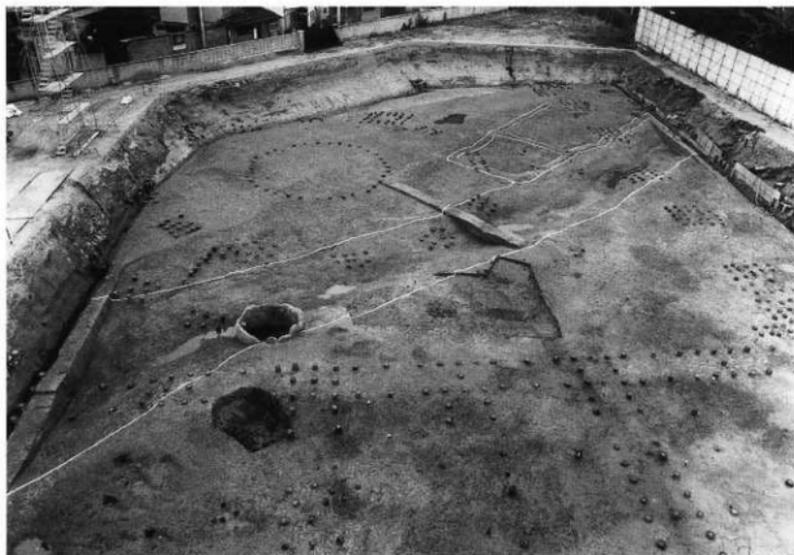
東区 ESE-103検出状況(北から)



同上 断面



東区 第2面全景(左が北)



東区 調査地東部遺構検出状況(西から)



同上 (北から)



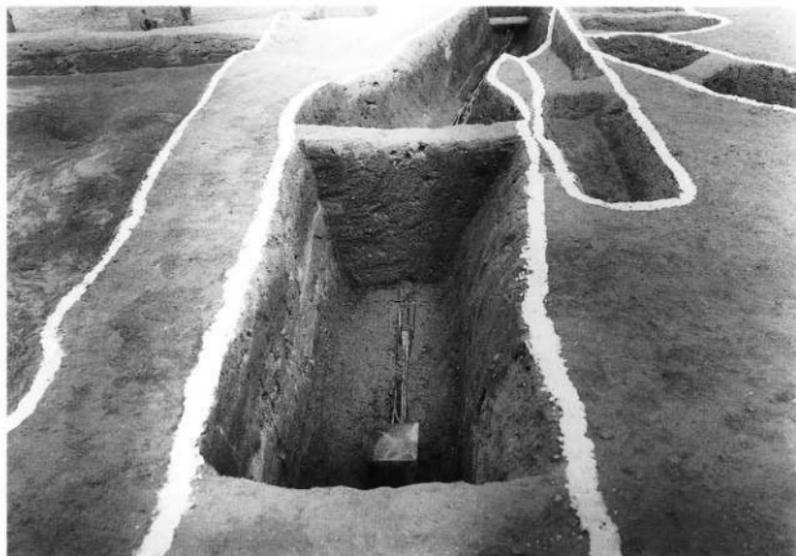
西区 第1面全景(上が北)



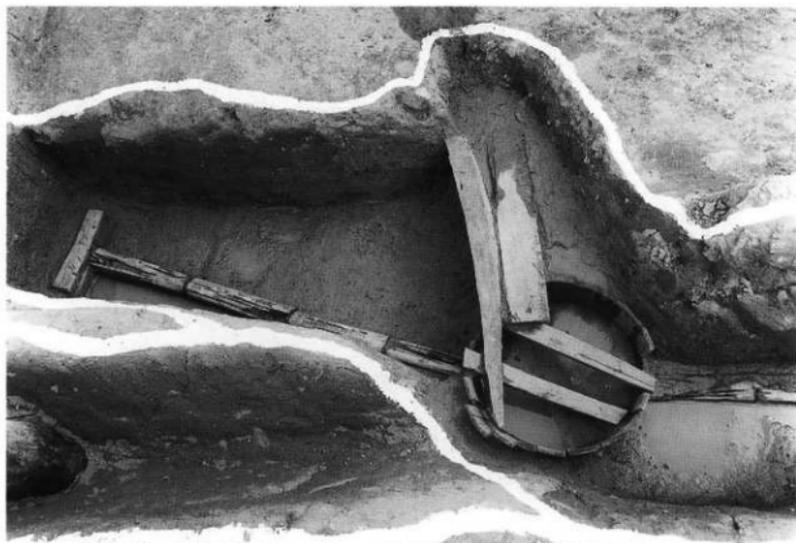
西区 WSE-101検出状況(南から)



同上 断面(北から)



西区 竹桶102検出状況(西から)



同上 細部(北から)



西区 第2面全景(上が北)



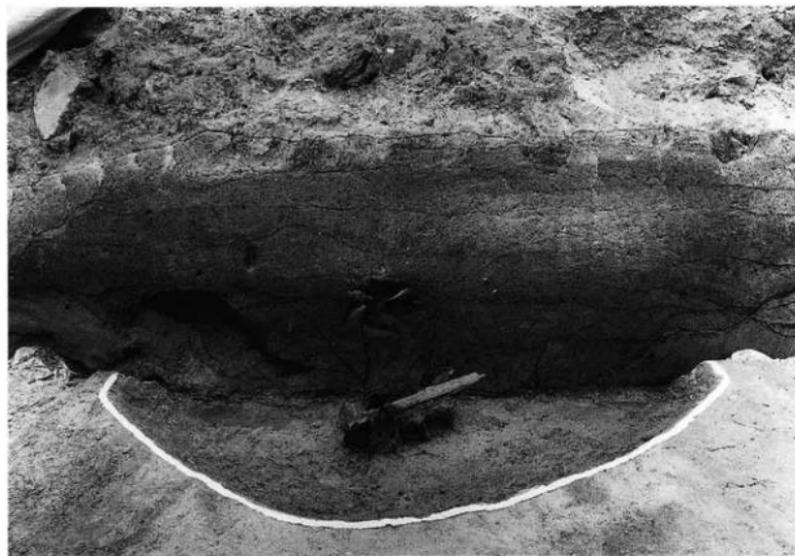
西区 第2面全景(西から)



西区 第2面全景(北から)



西区 WSE-201検出状況(西から)



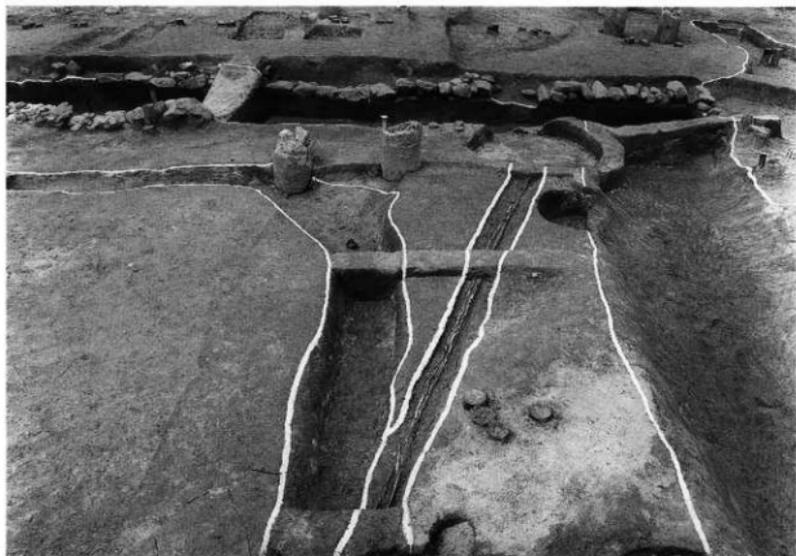
同上 断面(西から)



西区 WSE-202検出状況(西から)



同上 断面(西から)



西区 WSD-201検出状況(西から)



同上(南から)



西区 埋甕201検出状況(北から)



西区 埋甕202検出状況(西から)



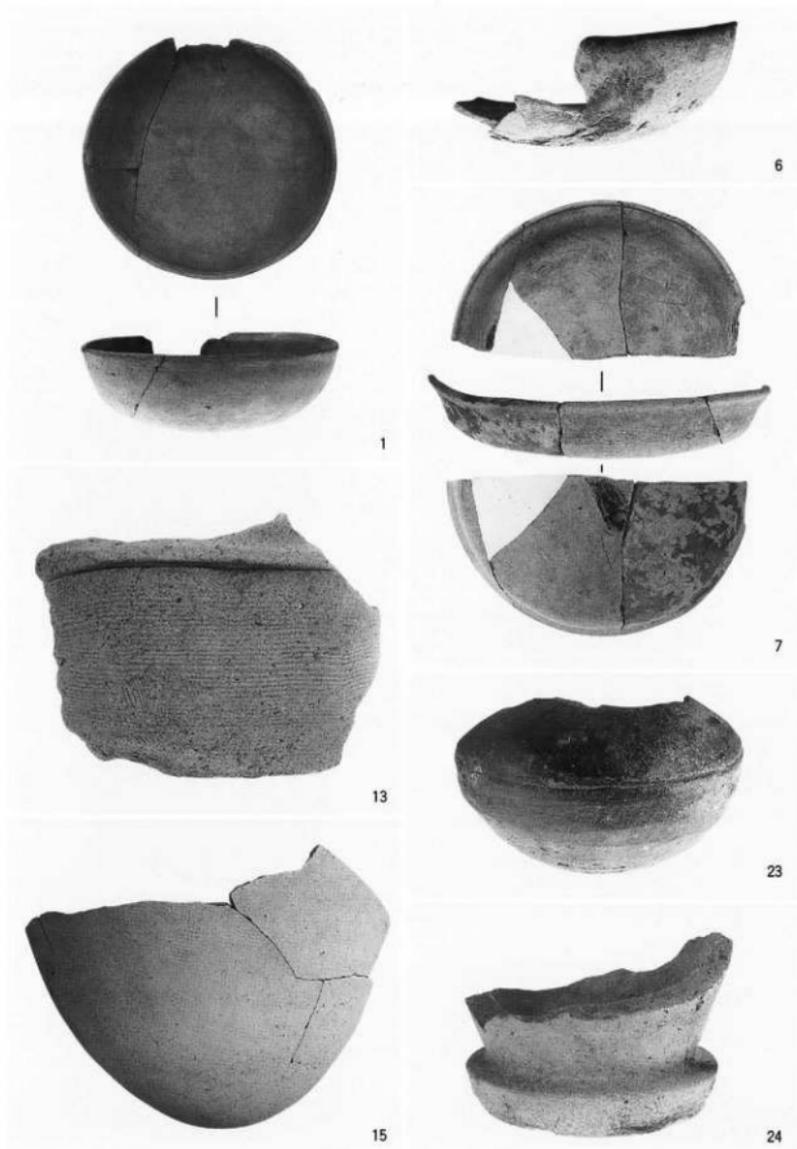
西区 第3面全景(上が北)



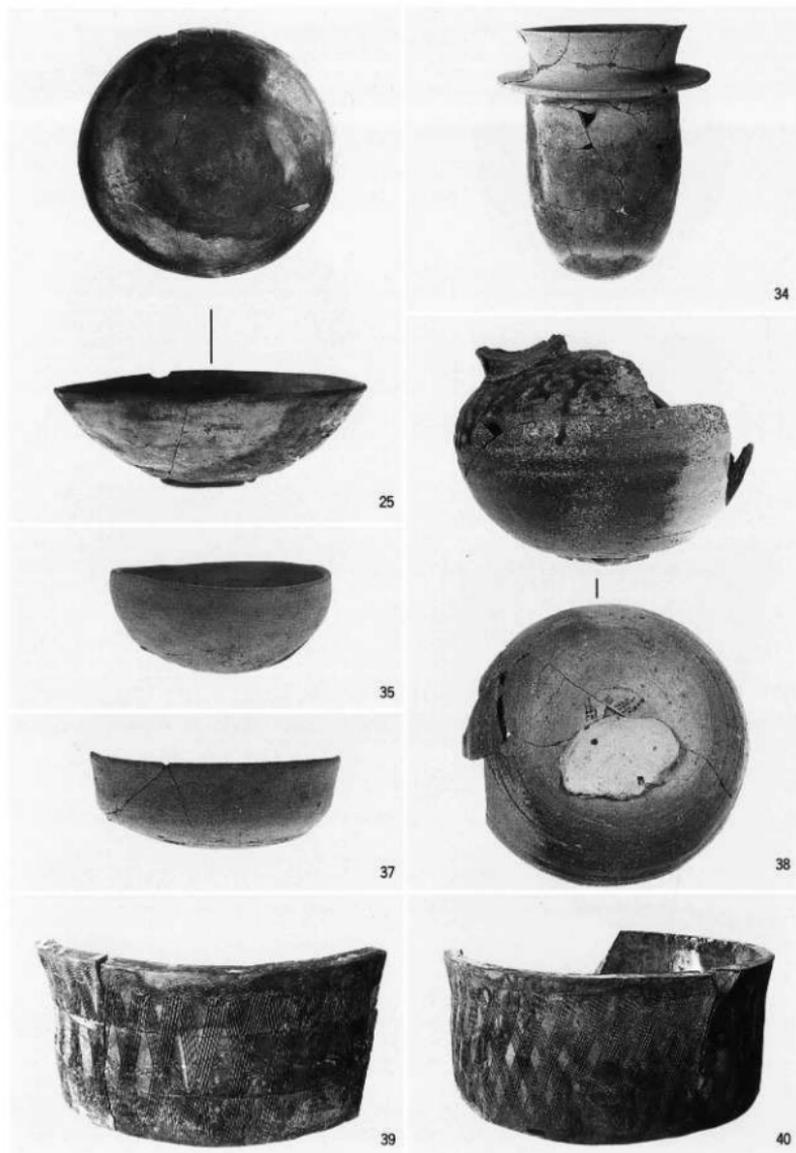
西区 WSD-303南部検出状況(南から)



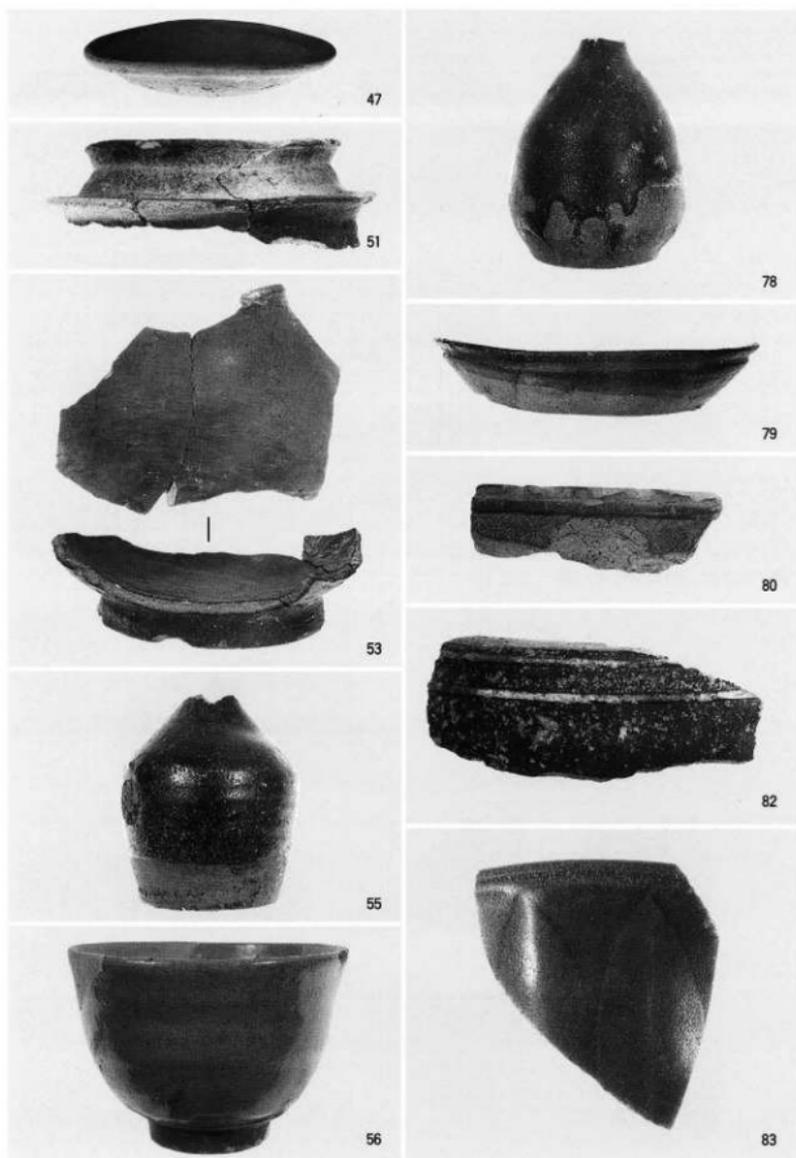
西区 第3面調査風景



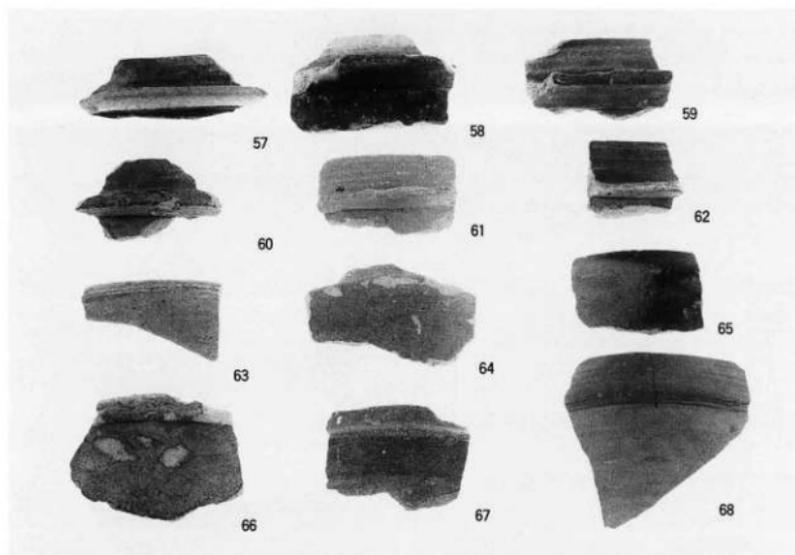
東区 ESD-101(1)、ENR-101(6・7・13・15・23・24)出土遺物



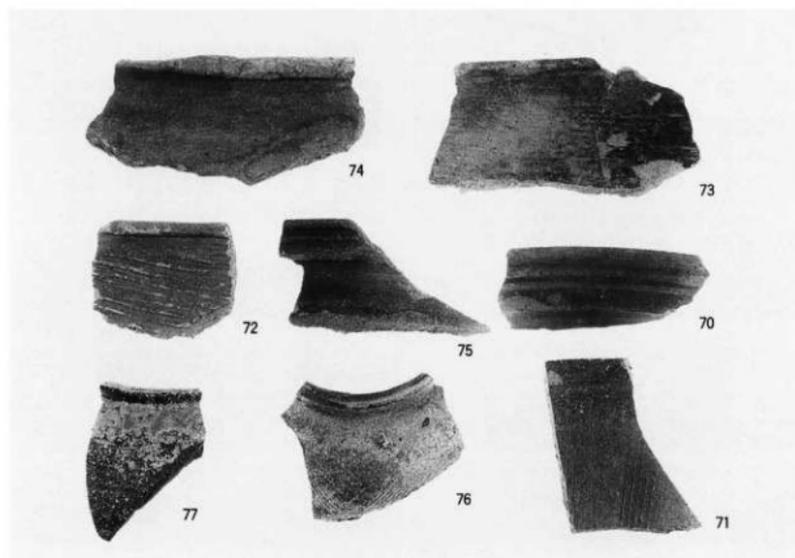
東区 ESE-102(25)、東区 第11層(34~36・38)、西区 WSE-101(39・40)出土遺物



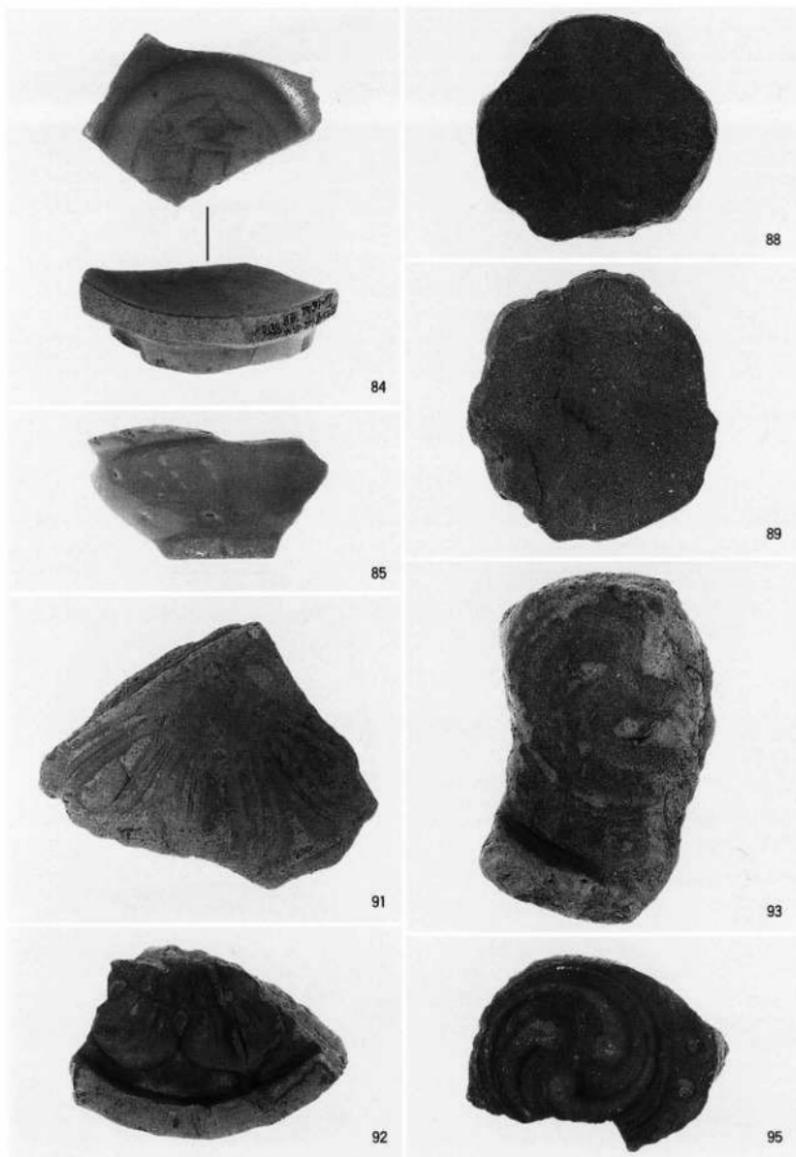
西区 WSE-201 (47·51·53)、WSD-201 (55·56)、WSD-201石垣内 (78~80、82·83) 出土遺物



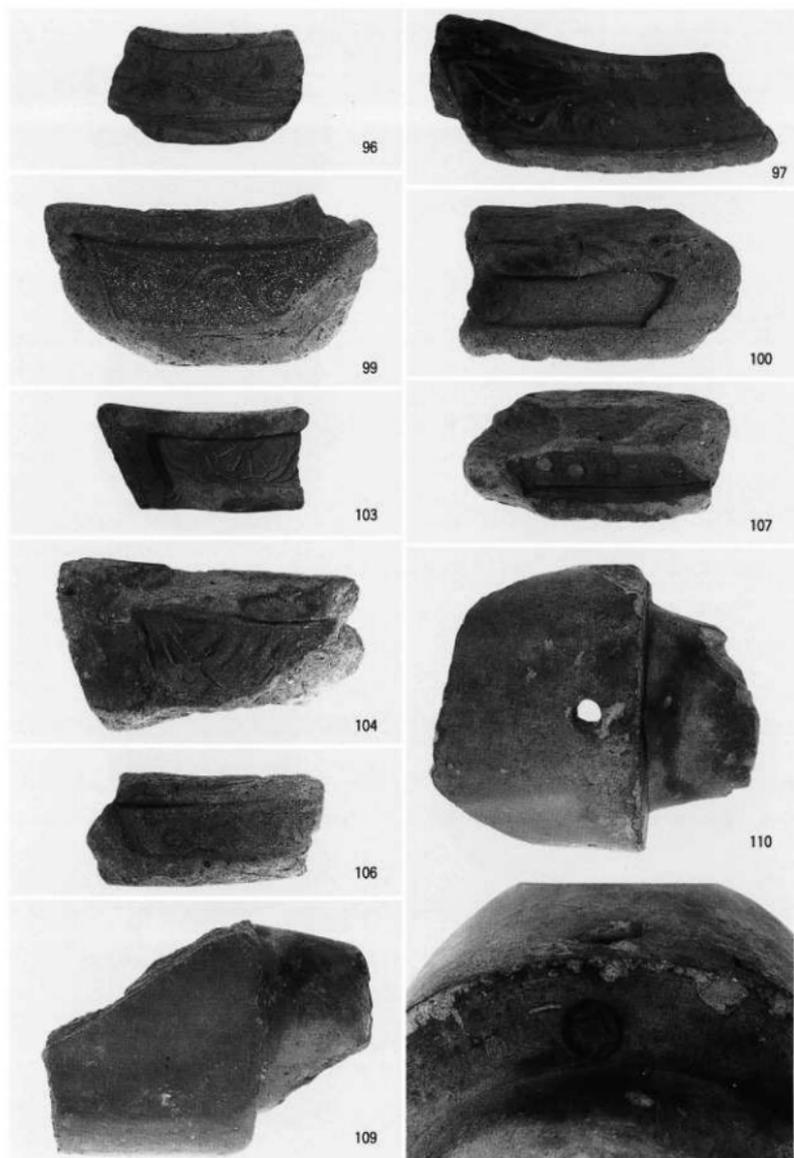
西区 WSD-201石埧内(57~68)



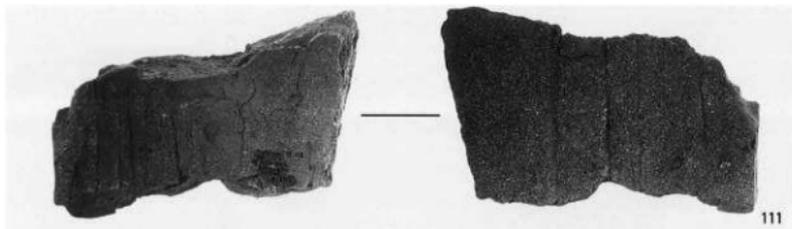
西区 WSD-201石埧内(70・71~77)出土遺物



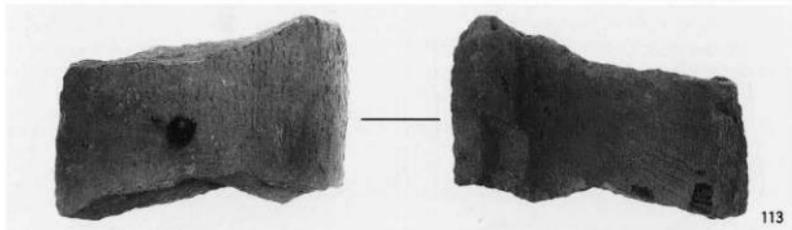
西区 WSD-201石埧内(84・85・88・89・91~93・95)出土遺物



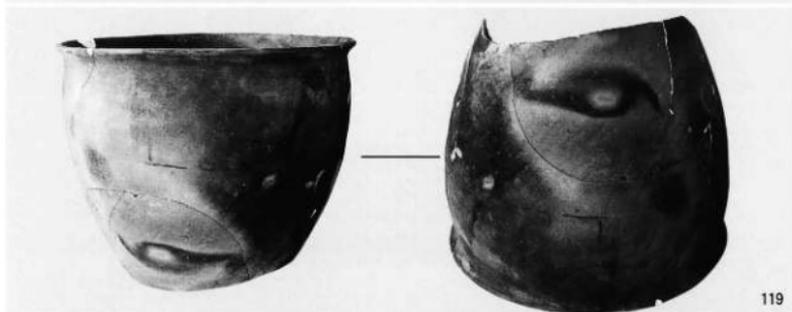
西区 WSD-201石垣内(96·97·99·100·103·104·106·107·109·110)出土遗物



111



113



119

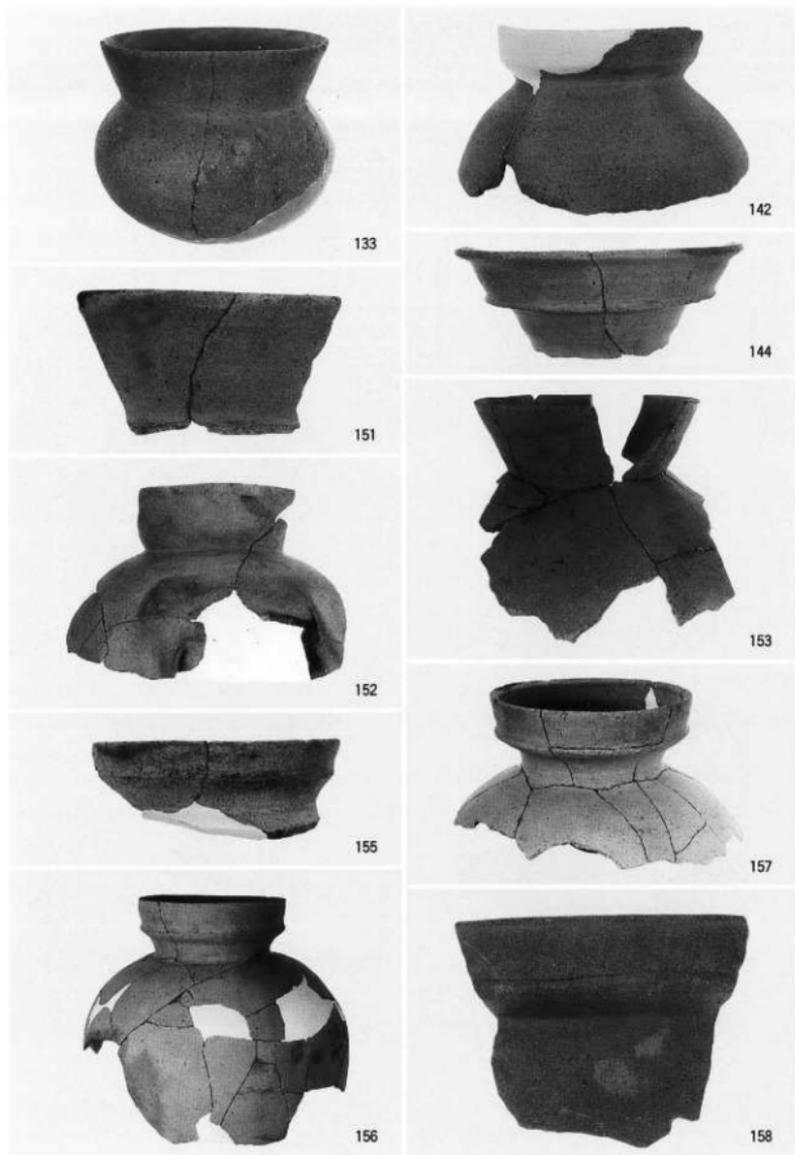


120

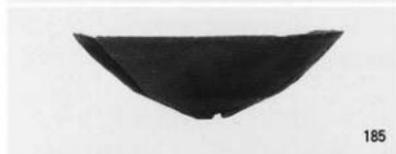
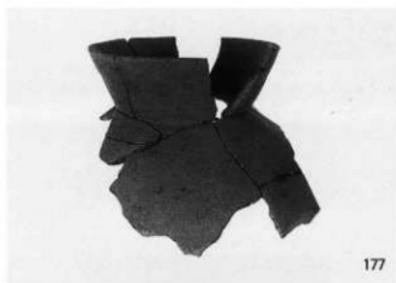
西区 WSD—201石垣内(111·113)、埋甕201(119)、埋甕202(120)出土遺物



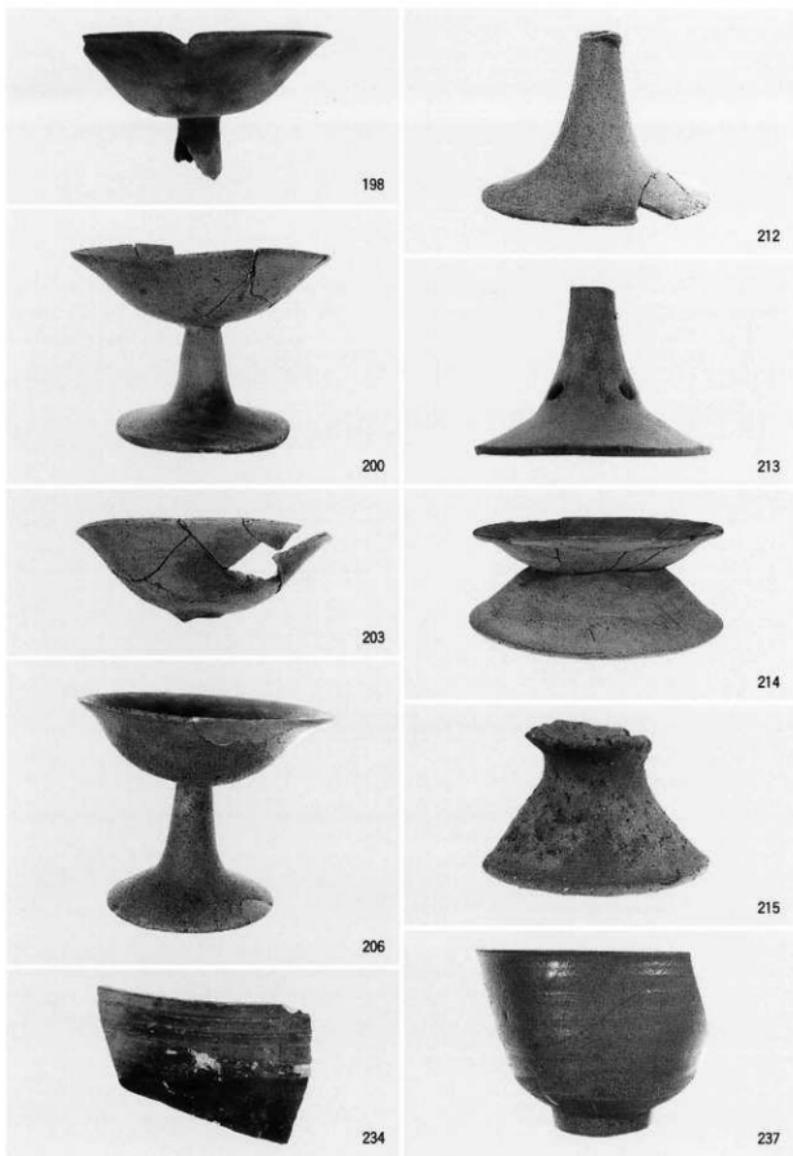
西区 WSD-301(121·124·126)、WSD-302(127)、WSD-303(134~141)出土遺物



西区 WSD-303(133·142·144·151~153·155~158)出土遗物



西区 WSD-303(177·178·180·182·185·192·193·200)出土遗物



西区 WSD-303(198·200·203·206·212~215)、西区 第9層(234·237)出土遺物

III 郡川遺跡第2次調査 (K R 90-2)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大字教興寺および大字黒谷で実施した教興寺土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する郡川遺跡第2次調査（KR90-2）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第79号 平成元年9月8日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が教興寺土地区画整理組合 中務 昭氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年5月7日から平成2年8月31日（実働99日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積2260㎡を測る。調査においては垣内洋平・北尾光男・北原清子・木村 優・沢村妙子・竹内浩伸・中西隆子・別所秀高（現（財）東大阪市文化財協会）・真柄竜が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成11年5月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田・沢村・西田・辻野、図面トレース－北原・岸田、遺物写真－原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 石材の鑑定については、八尾市立曙川小学校教諭 奥田 尚氏に依頼した。
1. 調査地の地形形成や地質学的な見解については、（財）東大阪市文化財協会 松田順一郎氏に御教示を受けた。

本文目次

第1章 調査に至る経過	103
第2章 地理・歴史的環境	104
第3章 調査概要	108
第1節 調査の方法と経過	108
第2節 基本層序	108
第3節 各調査区の検出遺構と出土遺物	112
1) 第1トレンチ	112
・第1トレンチ検出遺構	112
・第1トレンチ遺物包含層出土遺物	115
2) 第2トレンチ	118
・第2トレンチ検出遺構	118
・第2トレンチ遺物包含層出土遺物	124
3) 第3トレンチ	125
・第3トレンチ検出遺構	125
・第3トレンチ遺物包含層出土遺物	128

4) 第4トレンチ	130
・第4トレンチ検出遺構	130
・第4トレンチ遺物包含層出土遺物	133
5) 第5トレンチ	134
・第5トレンチ検出遺構	134
1. 第1面	137
2. 第2面	140
・第5トレンチ遺物包含層出土遺物	145
第4節 出土遺物観察表	149
第4章 まとめ	161

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	103
第2図 調査区設定図および地区割り図	109
第3図 検出遺構平面図	111
第4図 第1トレンチ北区 SD-1出土遺物実測図	112
第5図 第1トレンチ平面図	113
第6図 第1トレンチ北区 SD-5出土遺物実測図	114
第7図 第1トレンチ北区 SD-6出土遺物実測図	115
第8図 第1トレンチ南区 畦畔1東壁断面図	115
第9図 第1トレンチ第112層、第113層、第119層、第135層、第137層出土遺物実測図	117
第10図 第2トレンチ SD-7出土遺物実測図	118
第11図 第2トレンチ平面図	119
第12図 第2トレンチ SD-8出土遺物実測図	120
第13図 第2トレンチ 水田遺構平面断面図・畦畔断面写真	121
第14図 第2トレンチ NR-1出土遺物実測図	123
第15図 第2トレンチ 第247層、第283層、第284層出土遺物実測図	124
第16図 第3トレンチ平面図	126
第17図 第3トレンチ NR-2出土遺物実測図	127
第18図 第3トレンチ 第346層、第348層出土遺物実測図	129
第19図 第4トレンチ SK-1平面図	130
第20図 第4トレンチ SK-1出土遺物実測図	131
第21図 第4トレンチ SD-10出土遺物実測図	131
第22図 第4トレンチ平面図	132
第23図 第4トレンチ 第407層、第439層、第460層出土遺物実測図	134
第24図 第5トレンチ平面図	135-136

第25図	第5トレンチ	第1面8K・L地区検出遺構平断面図	138
第26図	第5トレンチ	SE-1平断面図	139
第27図	第5トレンチ	SE-1出土遺物実測図	139
第28図	第5トレンチ	SK-4・SK-5平断面図	140
第29図	第5トレンチ	SK-4出土遺物実測図1	141
第30図	第5トレンチ	SK-4出土遺物実測図2	142
第31図	第5トレンチ	SK-4出土遺物実測図3	143
第32図	第5トレンチ	SK-6平断面図	144
第33図	第5トレンチ	SK-7出土遺物実測図	144
第34図	第5トレンチ	SD-12出土遺物実測図	145
第35図	第5トレンチ	第504層、第528層、第545層、第550層、第551層、第553層、第561層 出土遺物実測図	147

写真目次

写真1	第2トレンチ調査風景	125
写真2	畦畔10断面	133

図版目次

図版 一	第1トレンチ北区全景（北から） 第1トレンチ南区全景（北から）
図版 二	第1トレンチ北区SD-1（西から） 第1トレンチ北区SD-4（西から） 第1トレンチ北区SD-6（西から）
図版 三	第2トレンチ全景（東から）
図版 四	第2トレンチ水田2～水田5（南から） 第2トレンチ水田4～水田7（南から） 第2トレンチ水田5～水田7（南から）
図版 五	第3トレンチ全景（東から）
図版 六	第3トレンチNR-2〈9J・K地区〉（東から） 同上断面（北から） 第3トレンチSD-9（北から）
図版 七	第4トレンチ全景（東から）
図版 八	第4トレンチSK-1（南から） 第4トレンチSD-10（北から）

- 図版 九 第5トレンチ第1面北部(北から)
第5トレンチ第1面検出遺構(西から)
- 図版一〇 第5トレンチ第1面SE-1(南から)
同上細部
- 図版一一 第5トレンチ第2面全景(北から)
第5トレンチ第2面全景(南から)
- 図版一二 第5トレンチ第2面NR-2(西から)
第5トレンチ第2面SD-17(西から)
第5トレンチ第2面SK-4・SK-5(西から)
- 図版一三 第5トレンチ第2面SK-6(西から)
第5トレンチ第2面SK-7(西から)
第5トレンチ第2面SD-13・SD-14(西から)
- 図版一四 第1トレンチ・第2トレンチ出土遺物
- 図版一五 第2トレンチ・第3トレンチ出土遺物
- 図版一六 第3トレンチ出土遺物
- 図版一七 第3トレンチ出土遺物
- 図版一八 第4トレンチ出土遺物
- 図版一九 第4トレンチ・第5トレンチ出土遺物
- 図版二〇 第5トレンチ出土遺物
- 図版二一 第5トレンチ出土遺物
- 図版二二 第5トレンチ出土遺物

第1章 調査に至る経過

大阪府八尾市の東部に位置する教興寺地区一帯は、生駒山西麓部から平野部にかけての標高35m～10mに位置しており、近年までは長閑な田園風景を残しており、開発のテンポも比較的緩やかな地域であった。ところが、昭和45年に地区の西部を南北に走る大阪外環状道路の開通以後は、近鉄大阪線高安駅東約1kmの圏内に位置していたことも相俟って、一躍、交通至便な地域として注目されるなかで、地域の随所で無秩序な開発が徐々に進行してきた。今回の調査対象となった八尾市教興寺および黒谷の一部を含む「八尾市教興寺土地区画整理事業」は、このような背景のなかで健全な市街化を計画的に推進するために実施された土地区画整理事業に伴うものである。土地区画整理の範囲は、東は六万寺恩智線（旧国道170号線）、西は大阪外環状線、南は安中教興寺線（府道山本黒谷線）、北は荒川に囲まれた面積約7haが対象とされていた。

調査地点はその地名が示すように、東方に白鳳期創建の教興寺が存在するほか古代の主要幹線道路である東高野街道と信貴越道が交差する地点に近接することから、これらに関連した埋蔵文化財の包蔵が想定された。平成元年8月に、八尾市教育委員会により区画整理事業の区画街路の設置予定地を対象とした遺構確認調査が実施された。試掘坑（2m×2m）を全体で12箇所に設



第1図 調査地周辺図

定して調査が行なわれた結果、事業計画地の南東部分を中心とした一帯で弥生時代～中世に至る遺物が検出された。これらの経過を経て発掘調査を実施するに至ったもので、発掘調査は教興寺区画整理組合・八尾市教育委員会・当調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき、当調査研究会が教興寺区画整理組合から委託を受けて実施した。現地での発掘調査期間は、平成2年5月7日～8月31日までの99日間である。調査面積は2,260㎡を測る。内業整理および本書作成にかかわる業務は、調査終了後平成11年5月31日まで随時実施した。

第2章 地理・歴史的環境

河内平野の東に位置し南北方向に屏風状に連なる生駒山地は、標高642mを測る生駒山を主峰とし、高安山、高尾山などの数多くの山々で構成されており、山頂稜線付近を境として西側を大阪府、東側を奈良県に区画している。生駒山地の岩石組成は主峰の生駒山付近は閃緑岩の残丘を成すが、その周辺は風化されやすい花崗岩で構成されている。したがって、急峻な山肌を持つ大阪府側は西流する諸小河川の侵食・堆積作用により、山麓の台地下位面に西接着して数多くの複合扇状地が形成されており、さらに、西方では傾斜変更線を境として扇状地性低地（扇状地中位面～下位面）、氾濫平野である河内平野へと移行する地勢を呈している。

郡川遺跡はこのような地形的特徴を示す八尾市東部に展開する遺跡で、さらに遺跡範囲内の地形的な特徴を示せば、西流し天井川化が進行している3本の小河川（北から郡川、荒川、一里松川）が存在している。遺跡は、郡川1～5丁目、教興寺、教興寺3～7丁目、垣内1～5丁目、黒谷1～4丁目の東西約1.1km、南北約1.2kmが範囲とされており、東部の扇状地部分で標高35m、西部の大阪外環状道路付近の氾濫原部分で標高10mを測る。

生駒山西麓部では、このような豊かな自然環境を背景として数多くの遺跡がその時代の様相に沿った形で推移していたことが明らかである。以下、今回の調査成果を含めて当遺跡を中心とした生駒山西麓部に立地する遺跡群を時期毎に概観してみたい。

旧石器時代においては、その生業たる狩猟・採集を推進するうえで生駒山西麓部は格好の場所であったことは想像に難くない。しかしながら、この時期の遺物は不時発見や後の遺物と共伴するものが多く、検出例はさほど多くない。東大阪市域では、山畑遺跡でナイフ形石器・尖頭器、坊主山遺跡と千手寺山遺跡からはナイフ形石器、神並遺跡からは国府型ナイフ形石器・縦長ナイフ形石器・横長ナイフ形石器・翼状剥片が採集されている。八尾市域では恩智遺跡でナイフ形石器が採集されている。続く、縄文時代草創期のものとしては生駒山西麓の草香山（東大阪市）と六万寺（東大阪市）から有舌尖頭器が単独で出土している。縄文時代早期の遺跡には神並遺跡（東大阪市）がある。神並遺跡は生駒山西麓の標高30m前後に位置する中位段丘上に位置するもので、神宮寺式に代表される押型土器群に共伴して膨大な石器類が出土している。縄文時代前期の河内平野の環境は河内湾Ⅰの時代で、温暖化に伴う海進現象により海岸線が内陸部に及んだことが地質調査等で明らかにされている。これら自然環境の変化から推定される生業等の変質に即応して、遺跡の立地がやや低位置に移動する傾向が認められた。その端的な例が扇状地末端部の標高10～15mに位置し、前期前葉の北白川下層Ⅱ式の段階に成立する恩智遺跡である。縄文時

代中期では、恩智遺跡のほか、中期初頭～中葉においては瀬戸内地方を中心に分布する船元Ⅰ式土器の出土をみた縄手遺跡(東大阪市)と、中期末～後期初頭には馬場川Ⅰ式土器(中津式併行)を伴出した馬場川遺跡(東大阪市)が恩智遺跡と同様、標高15～20mを測る扇状地末端部に成立している。縄文時代後期においては、縄手遺跡・馬場川遺跡・恩智遺跡が継続して営まれる他、花岡山遺跡・楽音寺遺跡(八尾市)が新たに出現している。土器の形式では、後期初頭においては瀬戸内系の中津式、後期前半では関東系の堀ノ内式、瀬戸内系の津雲A式が認められる。また、後期前半の段階で漁労活動を示す石鎌の存在が認められており、この期の段階で河内湾を中心とした新しい生業体系が確立している。縄文時代晩期では馬場川遺跡が晩期前半、恩智遺跡が晩期中葉に大規模な集落を形成している。恩智遺跡では、在地系の土器に共伴して東北系の大洞B-C式・大洞C式や瀬戸内系の原下層式が出土しており、当時の活発な地域間交流が窺える。

弥生時代前期では、縄文時代晩期から継続する鬼塚遺跡・植附遺跡(東大阪市)が古段階に出現するほか、今回の調査で八尾市域の郡川遺跡も弥生時代前期中段以降の遺跡であることが確認された。前期新段階では、生駒山西麓部の恩智遺跡で集落の成立をみるが、大勢としては水稲耕作の深化に伴う集落の拡大傾向に符合して平野部を中心とした集落の成立が顕在化している。続く、弥生時代中期では、恩智遺跡のほか環濠集落の形態を示す水越遺跡があり、同時期に存在した平野部の集落と比較する上で貴重な資料を提供している。弥生時代後期の遺跡は生駒山西麓部末端に、馬場川遺跡・上六万寺遺跡(東大阪市)・大竹遺跡・花岡山遺跡・水越遺跡・郡川遺跡・恩智遺跡、平野部に北鳥池遺跡(東大阪市)・太田川遺跡がある他、生駒山西麓部の海拔80m付近では高地性集落である岩滝山遺跡(東大阪市)がある。

古墳時代初頭の庄内式期では、古相のものが西の口遺跡(東大阪市)で検出されているのを除けば、水越遺跡・郡川遺跡のように庄内式期新相に成立したものが多い。古墳時代前期の布留式期においては、郡川遺跡・水越遺跡のほか、新たに恩智遺跡・大竹西遺跡で集落が形成されている。一方、古墳については前期後半の西ノ山古墳・花岡山古墳、中期初頭の心合寺山古墳、中期末の鏡塚古墳に至るまで累世的な形成を示す楽音寺・大竹古墳群が存在している。古墳時代中期～後期の集落は水越遺跡・郡川遺跡・恩智遺跡で検出されているが、調査件数が少なく不明な点が多い。中期の古墳は、花岡山遺跡東方の標高150m地点で検出された組み合わせ式石棺を主体部を持つ中ノ谷古墳、教興寺遺跡第1次調査(KO91-1)で検出された竪穴式石室、服部川の森田山古墳、垣内の塚本塚古墳がある。中期末から後期初頭にかけては、横穴式石室を主体部を持つ郡川東塚古墳(全長60m)・郡川西塚古墳(全長50m)の前方後円墳が築造されている。2基の前方後円墳は前期後半から中期後半にかけて安定した政治集団の存在を認めた楽音寺・大竹古墳群とは、位置的にも離れていることから、系統を異にする新興首長の墳墓であった可能性が高い。この期を境として、山麓部一帯では横穴式石室を主体部を持つ小型円墳を中心とした造墓活動が顕在化しており、特に後期後半以降の造墓活動により高安古墳群と称される群集墳が形成されるに至っている。高安古墳群については、『河内名所図会』にも描かれているように、古くから破壊がおよんだことが明らかであり、『中河内郡誌』に掲載されている大正11年段階の640基から平成2年の調査では185基が検出されたに過ぎず、多くの古墳がこの間に消滅したようである。昭和42年以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により発掘調査が実施されており、その実体の一部が明らかにされている。昭和42年には、高安古墳群のなかでも最

大級の横穴式石室を主体部に持つ愛宕塚古墳（6世紀後半）の調査が実施され豊富な土器類をはじめ馬具類・武具類が出土している。それ以降、昭和55年度には高安山1号墳・2号墳（7世紀中葉）、昭和58年度には郡川の法藏寺境内2号墳・3号墳・3-B号墳（7世紀代）、昭和60年には垣内で垣内1号墳（6世紀末築造・7世紀初頭追葬）・垣内2号墳（7世紀後半）・垣内3号墳（7世紀前半）、平成元年度には神立で芝塚古墳（6世紀後半築造・7世紀初頭追葬）、平成2年度には楽音寺で大石古墳（6世紀後半築造・7世紀初頭追葬）、同年には大窪の日宝寺墓地3号墳・4号墳（6世紀末～7世紀初頭）、平成4年度には黒谷の妙見寺境内1号墳・2号墳（6世紀後半）、平成5年度には山畑で195号墳（7世紀前半～中葉）の調査が実施されてきた。以上の調査成果や従来の知見から高安古墳群をまとめれば、全長3～15.7mの規模を測る横穴式石室を主体部に持つ円墳が中心で、墳丘規模は径10～25m、高さ3～5mを測る。築造時期については5世紀後半以降であるが、その多くが6世紀後半期に集中していることが指摘できる。古墳時代の終末期とされる7世紀代においても、凝灰岩製劔拔式冢形石棺が直葬されていた核山古墳やおんち山古墳、高安山山頂の標高480mに位置し小規模な横穴式石室を持つ高安山1号墳・2号墳が築造されており、終末期特有の立地条件や埋葬主体の形態が多様化する一面を呈し、少なくとも7世紀後半までは確実に造墓活動が行なわれている。

高安古墳群での古墳造営が終焉をむかえた7世紀後半以降は、古墳造営に邁進した氏族は古墳に代わって先祖神（氏神）崇拜の場所として寺院を建立し、氏族間の結び付きの強化が計られており、八尾市域の生駒山西麓部においても北から心合寺（白鳳時代～鎌倉時代）・高麗寺（奈良時代前期～鎌倉時代）・教興寺（白鳳時代～江戸時代）が建立されている。この時期の集落もこれらの寺域の周辺に存在したと推定されるが、調査例が乏しく明確にできたものはない。

平安時代の集落としては、西麓部を南北方向に走る東高野街道に沿った集落構成が推定されるが、平安時代中期を中心とする西の口遺跡（東大阪市）が確認されている程度で不明点が多い。寺院跡としては神立に玉祖神社の神宮寺であった蘭光寺（平安時代前期～明治）と楽音寺の大光寺（平安時代後期～室町時代）がある。なお、蘭光寺については、平安時代末期において源頼朝の祈禱所として守護されており、重要文化財に指定されている文治元年（1185）銘の北条時政の制札が残されている。瓦窯としては大竹の向山瓦窯（平安時代後期）が知られており、京都の平等院・醍醐寺・法勝寺跡・円勝寺等に屋瓦を供給している。続く鎌倉時代の集落は大竹遺跡・水越遺跡・花岡山遺跡で確認されている。遺跡以外では、当時河内と大和を結ぶ主要街道の一つであった信貴越道が調査地の南部を横断している。この街道は、文永7年（1270）に教興寺を再興した大和西大寺の長老叔尊が文永6年（1269）8月に南河内の丹南村の泉福寺からの帰路、信貴坂を西大寺へ帰ったと記す街道にあたる。室町時代の集落は福万寺遺跡・花岡山遺跡のほか、本調査の第5トレンチでも当該期の井戸が検出されている。

参考文献

- ・藤井直正、都出比呂志 1967『原始・古代の枚岡』東大阪市考古学研究会
- ・米田敏幸、佐藤良二 1982「八尾市恩智遺跡の石器再考」『旧石器考古学24』旧石器文化談話会
- ・下村晴文、菅原章太他 1987『神並遺跡Ⅱ』東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会
- ・梶山彦太郎、市原 実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
- ・原田 修 1971『縄手遺跡1』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報9 縄手遺跡調査会
- ・藤井直正、原田 修、中村友博他 1976『縄手遺跡2』東大阪市遺跡保護調査会

- ・1975『馬場川遺跡Ⅲ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14東大阪市教育委員会
- ・田代克己他 1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
- ・嶋村智子 1987『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ』『八尾市文化財調査報告14』八尾市教育委員会
- ・1970『鬼塚遺跡』『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高等学校地歴部
- ・福永信雄 1997『河内高東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について』『宗教と考古学』金岡恕先生の古希をお祝いする会編 勉誠社
- ・西村公助 1997『V水越遺跡(第2次調査)』『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・福永信雄1975『上六万寺遺跡』『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会
- ・1970『北島池遺跡』『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高等学校地歴部
- ・藤井直正他 1971『岩滝山遺跡』『埋蔵文化財包蔵地調査概報5』東大阪市教育委員会
- ・菅原章太 1987『西の口遺跡第1次発掘調査概要』(財)東大阪市文化財協会
- ・瀬川芳則 1978『第2章第3節』『大阪府史第一巻』大阪府
- ・原田 修、久貝 健、島田和子 1976『清原得藏所蔵考古資料図録第1部高安の遺跡と遺物』『大阪文化誌第二巻・第二号・通巻第6号』(財)大阪文化財センター
- ・坪田真一 1992『28. 教興寺跡第1次調査(KO91-1)』『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・享和元年(1801)『河内名所図会』
- ・1992『中河内郡誌』中河内郡役所編
- ・安井良三他 1994『河内愛宕塚古墳の研究』八尾市立歴史民俗資料館
- ・山本 彰他 1981『高安城跡範囲確認調査概要・Ⅰ-八尾市服部川所在-』大阪府教育委員会
- ・米田敏幸 1984『八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書-高安古墳群の調査他Ⅰ-』八尾市文化財調査報告10 八尾市教育委員会
- ・米田敏幸、嶋村友子 1986『3. 高安古墳群の調査』『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告12 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1993『高安古墳群芝塚古墳-八尾市神立1081の農用地道路新設工事に伴う古墳の発掘調査報告』『(財)八尾市文化財調査研究会報告38』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1995『高安古墳群大石古墳』『(財)八尾市文化財調査研究会報告44』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野乃 1991『19. 高安古墳群(90-381)の調査』『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告22八尾市教育委員会
- ・吉田野乃 1993『3. 高安古墳群-妙見寺境内1・2号墳(91-562)の調査』『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27八尾市教育委員会
- ・清 斎 1994『9. 高安古墳群(93-70~73)の調査』『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29 八尾市教育委員会
- ・山本 昭 1968『神立おんち山古墳調査概要』八尾市教育委員会
- ・江谷 寛 1994『平安京出土の河内産畿入瓦』『古代学研究所研究紀要第4輯』(財)古代学協会
- ・米田敏幸 1990『福万寺遺跡-上-の島町3丁目22-1の調査』『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』(財)八尾市文化財調査研究会

第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は八尾市教興寺土地区画整理事業に伴うもので、新設予定の区画街路部分を調査対象とした。調査地の地形は、生駒山西麓部に形成された扇状地の新时期扇状地下位面の傾斜地にあたり、耕作地としての土地利用のなかで人工的な地形改変が局部的に認められた。これらの地形に計画された区画街路予定地に沿って5箇所の調査区（第1トレンチ～第5トレンチ）を設定した。そのうち、東西方向に設定したものが第2トレンチ～第4トレンチで、南北方向に設定したものが第1トレンチ・第5トレンチである。各トレンチの規模は、幅5mで長さは第1トレンチ70m、第2トレンチ80m、第3トレンチ95m、第4トレンチ102m、第5トレンチ105mで総調査面積は2,260㎡を測る。

調査区の地区割り、は、国土座標（第VI系）を基準として北西隅（ $Y = -33,490,000$ 、 $X = -153,340,000$ ）から東西140m、南北170mにわたって設定した。一区画の単位は10m四方で、地区の表示は、東西方向がアルファベット（西からA～N）・南北方向がアラビア数字（北から1～17）とし、地区の表示には一区画の南東隅で交差する東西線・南北線を用い、1A地区～17N地区と呼称した。地点の表示は、国土座標（第VI系）の数値を使用した。

調査方法は現地表下から1m前後までを機械掘削し、以下0.5～1mについては、層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。なお、最終検出面からさらに幅1m、深さ1m前後のトレンチを設定して、下層部分の遺構・遺物の有無および土層堆積状況の確認を通じて遺跡形成前の地形形成の把握に努めた。各調査区ともに1面を調査対象としたが、第5トレンチについては2面（第1面・第2面）におよぶ調査を実施した。

調査の結果、弥生時代前期・中期、古墳時代前期・中期、室町時代に比定される遺構・遺物を検出した。遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器の他、屋瓦・石材・木製品がコンテナ25箱程度出土したが、遺構内から出土したものはコンテナ5箱程度で、そのほかはNR-1・NR-2の氾濫に起因する洪水砂層から出土したものが大半を占めた。

第2節 基本層序

調査地の地形は扇状地中位面の緩傾斜地にあたり、一部については後世の人工的な改変、さらにはNR-1・NR-2等の埋没自然河川が存在が相俟って、各調査区の土層は複雑な層相を呈していた。各調査区の層相の大半は、扇状地地形を流れる河川に最もよく発達すると考えられている網目状流路を成因とする亜礫ないしは角礫を含む淘汰不良の細礫泥質砂が占めていた。特に、NR-1・NR-2の周辺においては、斜行層理を基本としたクレバスプレイおよびシュートバーが観察された。以上のことから、各調査区で普遍的に存在する土層も認められたが基本層序としての統一は困難であったため、各調査区名を頭に冠した3桁の数字で層名を表現した。以下、各調査区の層序と検出遺構を概説する。

・第1トレンチ

遺構構築面である第138層オリープ黒色粘土～極粗粒砂層上面の標高はT.P. +9.9～9.5mで、